

平成22年度高崎市歴史民俗資料館企画展示Ⅱ 高崎の幕末維新シリーズ第3弾

幕末維新の若者たち

～高崎藩英学校



平成22年10月13日(水)～11月28日(日)

高崎市歴史民俗資料館

ごあいさつ

時はさかのぼること幕末維新期、全国の藩が優秀な人材を求めて「藩校」^{はんこう}を設置する中、高崎藩も「遊芸館」^{ゆうげいかん}「文武館」^{ぶんぶかん}を開設します。一方、慶応4年(明治元年)^{おぐりこうづけのすけただまさ}の小栗上野介忠順の斬首、三国戦争や北越戦争への出兵、翌明治2年の高崎五万石騒動勃発と、高崎藩には動乱の火種がくすぶり続けていました。そういった状況の中で、知藩事である大河内輝聲^{ちはんじ おおこうちてるな}は明治3年(1870)に「英学校」を開校し、若き日の尾崎行雄^{おざきゆきお}・新井領一郎^{あらいりょういちろう}・内村鑑三^{うちむらかんぞう}・長三石^{ちようさんせき}といった人々が学びます。後に彼らは日本や世界を舞台に活躍していきます。今年は「英学校」開校から140年目にあたります。

歴史民俗資料館では高崎の幕末維新シリーズ「小栗上野介と幕末維新の高崎」「高崎五万石騒動」に続いて「幕末維新の若者たち～高崎藩英学校」を開催します。英学校関連の史料のほか、市内の私塾・寺子屋にもスポットを当てます。当時の若者たちの青春群像をご覧頂き、市民の皆様に郷土への理解を一層深めて頂く機会となれば幸いです。

開催にあたりまして、御所蔵者の方々、ならびに近藤義雄氏、柳井久雄氏、清水吉二氏、中村茂氏をはじめとする御教示いただいた諸先生方、また各種御協力賜りました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成22年10月吉日

高崎市歴史民俗資料館

1. 日本の実力

日本で最初に教育に関心を示した政治家は聖徳太子(574~662)といわれています。彼は仏教の経典を研究した『三経義疏』⁽¹⁾という書物を著しました。やがて遣隋使^{けんずいし}や遣唐使^{けんとうし}などの留学生や、菅原氏^{すがわらし}・大江氏^{おおえし}といった学問を専門に司る一族も現れてきます。平安時代までは奈良や京都の貴族や寺社が学問の中心でしたが、鎌倉~室町時代になると東日本でも鎌倉五山^{かまくらござん}(建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺)や足利学校に各地から優秀な武士・僧などが集まりました。

江戸幕府の教育機関として有名なのが、昌平坂学問所^{しょうへいざか}(昌平黉^{しょうへいこう})⁽²⁾です。寛政の学制改革以降、朱子学⁽³⁾を教授する場として教育の中心地となりました。主に幕府直参の武士が対象でしたが、後には藩士・郷土・浪人の聴講入門も許可されました。やがて全国で国学・蘭学^{らんがく}・医学なども盛んになっていきます。幕末に黒船で来航したペリーは『日本遠征記』で、「日本人は紳士的で教養があり、好奇心が旺盛である」と高く評価し、既に蒸気機関の原理を理解していた事に驚いています。



湯島聖堂(昌平坂学問所)

2. 幕末と藩校

藩が運営する学校=藩校は、全国の約 300 あまりの藩ほぼ全てに設置されました。ほとんどが江戸中期以降の藩政改革を目的に、優秀な人材を求めました。^{にっしんかん}日新館(会津藩)、^{こうじょうかん}興譲館(米沢藩)、^{こうどうかん}弘道館(水戸藩)、^{しんしゅうかん}進脩館(中津藩、後の慶応義塾長小幡篤次郎)、^{めいりんかん}明倫館(長州藩、吉田松陰・桂小五郎・高杉晋作)、^{こうどうかん}弘道館(佐賀藩、教授に大隈重信)、^{はんこう}藩校時習館(横井小楠・北里柴三郎)、^{ぞうし}造士館(西郷隆盛・大久保利通・黒田清隆・松方正義・森有礼・

(1) 現存する日本最古の書物としても知られる。(2) 寛永9年(1632)に林羅山が私邸に建てた「先聖殿」を、元禄3年(1690)に将軍徳川綱吉によって湯島へ移転したもの。(3) 儒教を学問とする「儒学」の中でも南宋の朱子の学説で、江戸期の思想の中心となった。

大山巖・東郷平八郎)などが知られています。上野国では前橋藩(酒井氏)の元禄5年(1692)に開校された好古堂と同13年の求智堂が古く、次に沼田藩(土岐氏)の沼田学舎が寛保2年(1742)に開かれました。

江戸中期以降の高崎藩主で松平(大河内)氏の初代藩主輝貞は^{てるとさだ}好学で知られ、^{つなよし}將軍綱吉に『論語』を講義し、『^{ぶ び しょう}武備抄』『^{ずいりぞうひょうものがたり}図入雑兵物語』を自ら編纂したとされています。高崎藩に県内4番目の藩校^{ゆうげいかん}「遊芸館」が城内三ノ丸馬場跡に創立されたのは、^{てるたか}輝高の宝暦年間(1751~64)で、「文武両道」を原則として昌平坂学問所をはじめ全国から優秀な学者を招きました。しかし安永3年(1774)に火災に遭い、その後も災害で藩の財政が窮乏し、完全な復興はなりません⁽⁴⁾でした。



平林寺(歴代大河内家墓所)

付近には野火止陣屋があった



大河内輝貞墓



大河内輝高墓

幕末になると「攘夷」^{じょうい}と「開国」の思想対立が起きる中、「洋学」の重要性が高まります。最後の藩主輝聲はアメリカを中心とした列強の軍事力の情報を知り得る幕府の陸軍奉行並でした。財政赤字が膨らむ中、人材育成のため慶応4年(1868)に「文武館」^{ぶんぶかん}を設置し、藩士子弟を全て入学させました。⁽⁵⁾主な教官は内海釣経・青木錦村・市川左近・江積積善などでした。藩の若者は『孝経』や「四書五経」など和漢学を学び、鉄砲・馬術・遊泳などで体を鍛えたのです。

(4)天明3年(1783)の浅間山噴火や寛政10年(1798)に発生した城下大火災など。(5)前年に石上寺(現東京電力高崎支社付近)に和漢学校を仮設、翌年に遊芸館槍剣道場跡に併設した。

3. 英学校設立

版籍奉還の後、知藩事^{ちはんじ}となった輝聲^{てるな}でしたが、藩を立て直すために更に改革を推し進めていました。明治3年(1870)ついに県内に初めての英語を専門に教える「英学校」が設立されます。幕末以降、英語学校は各地に作られたものの、幕府や雄藩などの大藩で、8万2千石ほどの高崎藩に開かれたのは画期的な事でした。⁽⁶⁾

英学校は当初石上寺に置かれてましたが、その後檜物町^{ひものちょう}に仮設校舎が建てられました。⁽⁷⁾ 教えたのは静岡藩士⁽⁸⁾の作楽戸痴鶯^{さらくどちおう}、英学修行を終えた高崎藩士藤田栄親^{ふじた えいしん}、柏原藩^{かいばらはん}(兵庫県)の藩士小泉敬二でした。一方、生徒は輝聲自らが選抜しました。時代を動かすのは若者であると考えたのでしょうか。信任が厚い20～30代の藩士、藩医・町医、弟の輝剛など計50名のほか、輝聲



内海釣経(文武館教授)(享和2年～明治12年 1802～79)

高崎藩に仕えた儒者内海遜庵の子。諱は孜、字は子文。父の遜庵は元々尾張の人とも(『高崎忌辰録』)、江戸で浪人して儒学を学んだ(墓誌より)ともいう。釣経は遜庵に学び、後に藩校「文武館」の教授となった。藩士だけでなく学問を志す庶民にも教えたという。性格は温厚で、経史百家の様々な書物を読み、一読するだけでその内容を暗記したともいう。没後の明治43年(1910)に一族や門弟によって墓が建てられた。(墓所：若田町八幡霊園内興禅寺墓地)



市川左近(文武館教授)(文化8年～明治23年 1811～90)

羽前国東置賜郡一本柳村(現高畠町)出身で湯島聖堂に学ぶ。高崎藩士飯野金八を通じ、文久2年(1862)に田町で私塾を開いた。既に50歳であったが学ぶ者が多く、藩も再三招聘するが応じなかったという。輝聲は「積小学館」の扁額を書いて与え、鞘町に校舎を建てさせた。左近は質素儉約を励行し、水風呂で書状の余白も無駄にしなかったという。一方、明治6年の鞘町小学校設立には率先して金千円とも2千円ともいわれる大金を寄付した。(墓所：若松町龍廣寺墓地)

(6) 維新後明治10年代から県内各地に多くの英学校が開校した。(7) 『高崎藩近世史略』によるが、諸説があり具体的な場所は不明。(8) 痴鶯は『西洋英傑伝』『万国通史』などの翻訳者とされるが詳しくはわかっていない。



江積積善（文武館教授）（文化10年～明治28年1813～95）

高崎藩士で儒者でもあった江積容膝の外孫で本姓は黒田氏。通称源四郎、学習堂と号した。幼少時から聡明で、病気に伏せる事もなく祖父容膝に学んだ。毎朝早くから一日中講堂で勉強して怠ける事はなかったという。経世史家のあらゆる書物に通じ、約35年間教職について門弟は千人以上を数えた。門人達は宮部襄を通じて当時の著名な漢学者塩谷時敏に撰文を依頼し、積善の没後の翌年に高崎神社に頌徳碑を建てた（現存せず）。（墓所：若松町龍廣寺墓地）



田中毛野（文武館助教授）（天保13年～明治6年1842～1873）

名は鶴雄、通称亦太郎、毛野（読み不明）と号した。高崎藩士で国学者であった田中は、明治2年（1869）に島田八百樹とともに文武館の皇学助教授となった（27歳）。その後神祇官の宣教師となり『高崎領神社考』を著した。しかし明治6年（1873）に31歳の若さで亡くなっている。そのため田中家は父が再び家督を継いでいる。なお柴崎小学校設立伺いによれば、下大類村の荻野高敏が田中に国学を学んだという。（参考『高崎掃苔録』）（墓所：赤坂町長松寺墓地）

自身も生徒となりました。彼もまだ好奇心旺盛な22歳の若者だったのです。そして翌4年には後に「慶応の問題児」といわれた尾崎行雄^{おざきゆきお}が入学してくるのです。

4. 英学校の光と終焉

明治4年（1871）5月、英学校は小学校筆学所跡⁽¹⁰⁾へ移転し、同年7月の廃藩置県^{ちけん}で輝聲の運営から離れます。そして新政府から派遣されていた安岡良亮^{はいはん やすおかよしすけ}（元土佐藩士）は、藩士や藩士の子弟以外にも英学校入学を許可しました。これにより、後に上州産の生糸を輸出しアメリカで大活躍する新井領一郎^{あら いりょういちろう}も入学します。翌5年には内村鑑三^{うちむらかんぞう}が入学し、英学校はまさに後の“世界を舞台に活躍する人々の研鑽の場”となりました。しかし時代の波は激しいもの

(9) 行雄と父行正は、高崎藩政改革を断行するべく新政府から派遣された安岡良亮について高崎にやってきた。(10) 文武館小学寮の筆学所は宮元町にあったとされるが詳しい位置はわからない。

登籍録（英学校の設立趣意書と名簿）

「登籍録 鞭苔固陋開論偏見 以解西洋之情態、為方今之肯要。我藩幣作案戸教師、創英黌以導一藩之士。抑謂之西洋、奚書干英、然其國政度之嚴肅、文章精簡、魁干各國何倦言耶。此舉實以為兩毛之嚆矢、敢謂天下之先鞭者也哉余亦臥干下風、刮目而待其開化之曉。明治三年秋八月、当校助咬菜長濟敬識云爾 桂関源聲書干英校北睦下」

（大意）「因習固陋、旧弊な偏見は鞭打つてでも教え諭し、日本を文明開化の世にするには西洋の情勢を解明しなければならない。今こそ、この事実を認める事が必要であり、その為、我が高崎藩では作案戸痴黨を教師として英学校を創設し、藩士の指導にあたる事にした。一口に西洋といっても色々な国があるが、その中でもイギリスは飛び抜けており、政治の制度は嚴格、文芸學問は精密にして簡素、全ての面で西洋諸國に先駆けておる事は他國も認めている所である。我が藩による英学校創設の快挙は、近くは兩毛の地である上野國・下野國においても最初の事であり、広く天下を見廻しても英學の先鞭をつけたといえよう。私など單に、その下風に立つて学校の發展を手助けする者に過ぎないが、目を大きく見開いてわが國に文明開化の時が訪れるのを心待ちにしている。明治三年八月、高崎藩校助教・長濟（長三石）が敬うて記して云ふ。書は英学校北に住む桂関・大河内輝聲が筆をとった。」

（清水吉二氏訳）

大河内輝剛	原田潔身	工藤俊栄	藤田四郎三郎	堤慥爾	吉田升庵	飯田亭司	津田仙	山崎精	吉田道成	塚田鉄次郎	浅井沈
塚江藤太	吉川昌悦	三浦蘇一	大嶋亨	三上鳴海	反町俊宅	横山吉次郎	植木先	大沢三男	佐藤伯林	山岡勝人	山田大衛
田井寛司	大沢亘	細野勲	矢嶋保太郎	長三石	山田道三	嶋田利夫	若原辨次	福田文哉	桑野忠次	石原鉄三郎	八木録弥
内村善次郎	宇垣哲夫	桜井忠多	会田基内	工藤常丸	熊井軍一郎	勅使河原求馬	神田金太郎	中村真澄	近藤五郎	稻生可也	
松井強哉	深海三思郎	高橋周格	下条周治	田中宗秀	反町謹斉	大熊啓二	佐藤精一	生駒元碩	高橋意伯	大熊植斉	桑原栄斉
熊井文弥	武井節三	工藤小一郎	内田善次郎	石坂藤三	深井勘六	関直哉	浅野誠伯	（生徒・関係者六九名）			

でした。明治5年に学制が發布され、英学校周辺の環境も大きく変わっていきましました。まず安岡と教師小泉^{あつみ わたらいけん}篤が度会県（三重県）へ^{（11）}転出、彼らに尾崎行雄・新井領一郎など多くの若者がついていきます。一方、岩鼻県から群馬県令となった青山^{ただす}貞は藩校であった文武館を廃止し、英学校も明治6～7年には廃校となりました。幕末に輝聲が築いた教育の場は無くなってしまいました。しかし播かれた種が見事に花開いたのは、後の近代の若者たちの活躍を見れば明らかでしょう。

長三石（英学校生徒）天保2年～？（1831～？）

高崎の町医であった長玄同の三男。安政6年（1859）長崎のオランダ人医師ポンペの医学伝習所で松本良順と出会う。幕府医学所の緒方洪庵が没したため、松本が頭取に任命され長も助教となる。その後高崎藩英学校で学んでから愛知へ移り名古屋大学医学部の基礎を築く。更に高崎陸軍歩兵第三連隊に軍医として勤務した。大磯など神奈川県での消息までは知られるが、その後不明である。語学に通じていたほか書にも巧みであった。張三石、長秀則ともいう。



大河内輝聲（英学校生徒）嘉永元年～明治15年（1848～82）

初名恭三郎、後に輝照、輝聲に改名したのは明治3年からである。12歳で最後の高崎藩主となり、慶応3年に幕府の陸軍奉行並となった。三国戦争や北越戦争等に出兵している。封建制の残る高崎藩で洋式軍装を取り入れるなど開明的な側面を見せ、五万石騒動勃発時は21歳の若さで、その対応に苦慮している。財政破綻を前に負債の半分を個人負担する伺いを政府に出している。学問好きで文武館や英学校を設立し、漢学の教養が高く、『大河内文書』は有名である。そのほか狂歌にも熱心であった事が知られる。（写真：昭和2年『高崎市史』より）



新井領一郎（英学校生徒）安政2年～昭和14年（1855～1939）

勢多郡水沼村（桐生市）出身で名主の星野家10代目当主弥平の6男。慶応3年（1867）鹿角村の旧家新井伝右衛門の養子となる。戊辰戦争の際に星野家は会津藩援助の嫌疑をかけられ、また大名・旗本に貸した借財の多くが帳消しとなった。領一郎は生糸貿易の世界で立身を図るため、高崎～伊勢～開成学校で英語を習得する事に専念した。渡米し、佐藤百太郎の「日本米国用達社」を拠点にして生糸販売を開始する。松方正義は義理の息子、孫種子はハル駐日大使の妻。（写真：『群馬県史通史編8巻』より）



尾崎行雄（英学校生徒）安政5年～昭和29年（1858～1954）

相模国津久井郡又野村（現神奈川県相模原市緑区又野）出身。幼名彦太郎。会津戦争後に弾正役人となった父行正と共に、明治4年に高崎に引越し英学校で学ぶ。安岡良亮に従い高崎から伊勢度会県へ移り、慶応義塾・工部寮・新潟新聞主筆・報知新聞論説委員を経て東京府会議員。明治23年（1890）第一回総選挙で三重県より出馬して当選する（その後63年間連続25回当選は世界記録）。「憲政の神様」といわれ軍部にも物怖じしなかった。東京市長時代にアメリカポトマック川辺へ友好の桜を3100本植樹している。

（尾崎行雄像：東京都千代田区永田町・憲政記念館中庭）



内村鑑三（英学校生徒）万延2年～昭和5年（1861～1930）

高崎藩士の内村宜之の子で、江戸小石川に生まれる。慶応年間から明治初年にかけて、宜之と鑑三一家は新潟～石巻と任地を点々とする。明治4年に高崎柳川町に落ち着き、鑑三は翌年から英学校に入学した。その後東京英語学校（東京大学予備門）を経て札幌農学校でクラーク博士に学び、新渡戸稲造に出会う。キリスト教に改宗して渡米し、神学や聖書の研究を行って非戦論や平和主義を唱える。『代表的日本人』

『余は如何にして基督信徒となりし乎』などの世界的名著がある。（写真：内村鑑三記念碑・頼政神社境内）

5. 寺子屋の読書熱

寺子屋は中世の寺院の教育がはじまりともいわれますが、江戸時代中期以降の商工業の発展や、社会のきまりやしきみが、文書による比率が高くなるに従い、都市部から周辺の農村・漁村に広まっています。寛政期（1789～1801）に広まりはじめた寺子屋は天保期（1830～44）に急速に増えていきました。はじめは村々の知識人である僧侶や神官が師匠（教師）となる場合がほとんどでしたが、やがて禄を失って浪人となった武士や、江戸や京都などで修学した町人の師匠も増えていきました。

倉賀野大杉神社の神官高木信濃守^{たかぎしなののかみ}の寺子屋を例に挙げましょう。授業は毎

（11）文武館の建物は、後に高崎学校など各種学校に使用され、高崎幼稚園が新築されるまで使われた。

日午前8時～午後4時、休みは五節供だけでした。7歳から修学し、男女共学で読み・書き・そろばんを習い、寺子（児童）が悪さをすれば水が入ったどんぶりを持って立たされました。個別指導で、成績は師匠の家庭訪問の際に親に伝えられました⁽¹²⁾。現在では寺子屋教育が全国の隅々に行き届いていた事が、その後の近代教育につながっていったと考えられています⁽¹³⁾。

日本の明治期以降の近代産業の発展、戦後の経済復興と成長、そして近年では日本の文化が海外に賞賛され、新しい文化として輸出されております。また最近では、長年の基礎的な研究が世界的にも認められ、ノーベル賞の受賞など喜ばしい出来事が続いております。現在の発展は、江戸時代の藩校・私塾・寺子屋の教育と文化が充実し、ほとんど全国に限なく広がっていた事と決して無関係ではないと考えられています。

奇しくも英学校で席を同じくした尾崎行雄は政治、新井領一郎は経済、内村鑑三は思想、長三石は医学と、それぞれの分野で活躍します。若者たちが互いに切磋琢磨する場の重要性がうかがえるようです。将来に向けてもう一度教育と文化の大切さを見直す時期にやってきたのではないのでしょうか。



梅山多喜哉（下小鳥村寺子屋師匠）

嘉永2年～明治31年(1849～98)

高崎五万石騒動の調停に奔走した名主太平の長男として生まれる。幼名は太吉。幼い頃より篤学にして慶応2年(1866)頃から寺子屋を開き(16歳)、生徒は数十人で明治5年の学制発布まで続いた。同7年に戸長(26歳)、同12年には4ヶ村連合戸長を務めた。町村制施行により同22年には初代六郷村長となって村政に尽力した。しかし同30年に病氣退職し、翌年12月18日に逝去した。行年50歳であった(墓誌より)。小鳥小学校開設の際には一時教員になったという(『六郷小学校百年史』より)。

(墓所：下小鳥町蓮華院墓地)

(12) 記録では高木神官では節供と歳暮の年2回の授業料であった。(13) 幕末維新期に来日した外国人の多くが、日本の文盲率の低さに驚き、様々な記録に書き留めている。

企画展Ⅱ 『幕末維新の若者たち ～高崎藩英学校～』 展示資料目録

NO.	資料名	年代	数量	所蔵
1	書見台		2	本館
2	和漢三才図絵	江戸時代	1	本館
3	大全早引節用集	寛政5年(1793)	1	本館
4	四聲玉篇和訓大成	寛政4年(1792)	1	本館
5	嘉永武鑑(全三冊)	嘉永6年(1853)	1組	本館
6	東山道総督府下向につき人馬継立高崎宿請書	慶応4年(1868)2月	1	山口ひろ子氏
7	「御領分村々御回達写」戸籍人別明細取調につき達書	明治2年(1869)6月	1	梅山功氏
8	「雑記」高崎藩小学寮規則、学校規則	明治3年(1870)閏10月	1	川合英夫氏
9	「懷中雑記」高崎藩英学校開設布達	明治3年(1870)11月	1	川合英夫氏
10	「天然人造道理圖解」	明治2年(1869)	1	本館
11	「智氏家訓」	明治8年(1875)	1	本館
12	「小學動物教授書」「小學植物教授書」	明治15年(1882)	1	高崎市役所総務部総務課・本館蔵
13	「五七絶句解」	享保17年(1732)	1	本館
14	「論語」	江戸時代	1	本館
15	「小學句讀字引大全」	明治14年(1881)	1	本館
16	四書	明治18年(1885)版	5	本館
17	算盤(寛政8年の墨書きあり)	寛政8年(1796)	1	本館
18	「商賈往来」	文化2年(1805)	1	本館
19	「商賈往来」	江戸時代	1	本館
20	「世和多理草」	寛政元年(1789)	1	高崎市役所総務部庶務課蔵
21	「女訓孝経」	天保14年(1843)	1	本館
22	「洛陽往来」	天保9年(1838)	1	本館
23	手習い本	天保6年(1835)	1	本館
24	二宮尊徳像		1	本館
25	「経典餘師」	天保14年(1843)	1	本館
26	菅原道真像由来記	天保11年(1840)	1	笠原秀雄氏
27	鉄如意	江戸時代	1	笠原秀雄氏
28	塙学校生徒奉納額	明治12年(1879)9月25日	2	北野神社
29	菅原道真木像	延宝8年(1680)	1	笠原秀雄氏
30	幸宮神社の算額(高崎市指定重要文化財)	文化7年(1824)3月	1	幸宮神社
31	仕立教室の奉納写真額	明治36年(1903)3月	1	北野神社
32	鳥居建立の奉納写真額	年代不明	1	北野神社

この企画展を開催にあたり、関係諸機関、並びに個人の方々に、ご指導・ご協力を頂きました。
ここに御芳名を記し、御礼申し上げます。

協力機関・個人（順不同、敬称略）

（財）群馬文化協会 群馬県立文書館 高崎市役所総務部庶務課市史資料担当
高崎市北部公民館

幸宮神社 北野神社（下小埜町）

梅山功 笠原秀雄 川合英夫 佐藤繁 山口ひろ子

頼政神社 玉田寺 向雲寺 興禅寺 光明寺（若松町） 福田寺 龍廣寺

近藤義雄 柳井久雄 清水吉二 森田秀策 高井和重
中村茂 中嶋宏 岡田昭 関恒雄
高井郁朗 阿久津聡 志村隆 田口正美

平成22年度企画展Ⅱ

「幕末維新の若者たち

高崎藩英学校～」

平成22年10月13日(水)～11月28日(日)

企画 高崎市歴史民俗資料館

〒370-0027 群馬県高崎市上滝町1058

Tel/Fax 027(352)1261

E-mail: rekimin@city.takasaki.gunma.jp

URL: <http://www.city.takasaki.gunma.jp/soshiki/rekimin/index.htm>